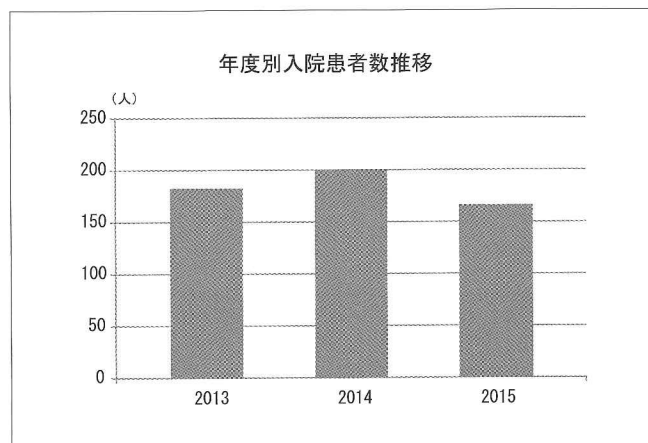


2015年度の脳神経外科および神経内科の入院患者総数は165名であった(図1)。内訳は脳血管障害(脳梗塞・TIA、脳出血、くも膜下出血)105名(63.6%)、頭部外傷関連(外傷性くも膜下出血、外傷性脳出血、急性硬膜下出血、慢性硬膜下出血、脳挫傷)22名(13.3%)、めまい15名(9.1%)、てんかん・症候性てんかん9名(5.5%)、脳腫瘍2名(1.2%)、その他(パーキンソン病、舌咽神経麻痺、Fisher症候群、アルツハイマー型認知症、ミオクロヌス、低脊髄圧症候群、頸髄症・胸髄症、低酸素脳症)12名(7.3%)であった(図2)。なお、脳血管障害患者には、他院からのリハビリ目的での転院も含まれる。前年度と比較し、全体として患者数はやや減少、脳血管障害とその他疾患の比率には大きな変化はなかった。脳血管障害の内訳は、脳梗塞・TIAが83名と全体の8割近くを占めた。回復期診療においては、熊本市方面からだけでなく天草市方面からの転院受け入れを進めるとともに、脳卒中発症後1週間程度のまだ症状が十分に安定していない急性期患者でも積極的に受け入れを行い、患者数の確保に努めた。

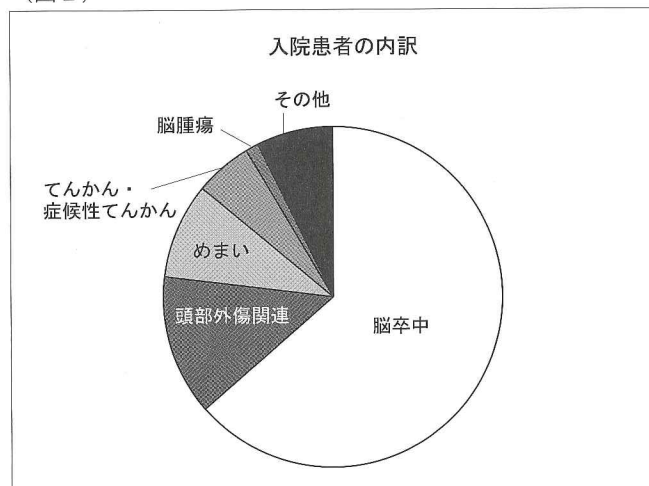
一方、外来の月別患者延べ数の変動は例年と大きな変化はみられなかった(図3)。患者総数は2,443名で前年度の2,654名より200名近く減少しているが、これは神経内科外来が休診となった影響があったものと思われる。なお疾患の内訳は脳血管障害、パーキンソン病などが多数を占めた。

三角・大矢野地区は、高齢化と人口減少という地方の問題点がより深刻な地域である。脳疾患は、脳血管障害、認知症、パーキンソン病など加齢がリスクとなる疾患が多く、これまで当院の脳・神経疾患の入院および外来患者数はともに微増傾向であった。しかし、今回ついに減少傾向に転じたということは、もはや人口減少の影響は無視できない状況であると思われる。とはいえ、当地域の脳疾患医療において当院の果たす役割が非常に大きいことには変わりはない。当院は脳疾患専門医が在任し、多職種共同での診療体制が整っており、頭部MRIなど各種検査が迅速に施行でき、またリハビリテーションも充実している。今後も地域住民の需要に応えるべく、さらなる治療成績の向上を図りたい。

(図1)



(図2)



(図3)

